

第41回 中田かかし祭 グランプリは今泉自治会!

(9月21日・22日)

「五箇山合掌造り家屋」

「こきりこ」



中田かかし祭

1983年から始まった「中田かかし祭」は、中田地区の中田コミュニティセンター周辺・中田中央公園に展示されます。ワラや木など身近にある材料を使い、世相を反映したユーモラスな、かかしたちがファンタジーの世界を繰り広げます。かかしコンクールのほか、よさこいなど多彩なイベントも実施されます。地区住民が一丸となり、明るく和やかなイベントとなるよう取り組んでいます。

たかおか
更生保護だより



発行 高岡市保護司会
高岡市更生保護協会の協力
高岡市役所社会福祉課内
〒933-8601 富山県高岡市広小路 7-50
☎ (0766) 20-1367 Fax 20-1371
高岡市更生保護サポートセンター
高岡市役所東別館 2階
☎ (0766) 53-5101 Fax 53-5102
E-mail: tksc@takaoka-hogosikai.org

安全安心な地域社会を目指して



高岡警察署 署長 古川 秀治

高岡市保護司会の皆様方には、日頃から地域に根ざした更生保護活動の推進に、多大なご尽力をいただいておりますとともに、警察活動の各般にわたり、ご理解とご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

さて、高岡警察署管内の治安情勢については、昨年の刑法犯認知件数は一昨年と比べ増加し、本年も昨年を上回るペースで推移しています。特に自転車盗難被害の増加が顕著であり、当署では、高岡市や防犯協会などの関係機関と連携して、駐車場の警戒や、利用者に対してカギかけを呼びかけるなどの抑止対策を行っています。また、万引きも多く発生しており、店による防犯カメラの設置や、店員による客の目を監視する声かけなどを推奨し、予防を図っているところであります。

特殊詐欺被害についても、本年は昨年に比べ件数、被害額ともに大幅に増加し、深刻な情勢となっております。特にサポート詐欺を含む架空金請求詐欺の被害が目立っています。また、SNS型投資詐欺被害は、儲けたいと思う人の心につけ込む悪質巧妙な犯行であ

り、1件当たりの被害額が大きく、合計で全体の半分以上を占めています。県警察では、こうした情勢から「詐欺多発非常事態宣言」を发出し「見知らぬ人にお金を払うときは誰かに相談をキヤッチコピー」に、県民皆様方のディフェンス力（危険を察知する）を強化するため、各種啓発活動に取り組んでおり、当署では安全メールなどによる情報発信のほか、金融機関や医療機関と連携し、特殊詐欺手口を周知するチラシの待合席への配置や、各地区の防犯教室での特殊詐欺手口の紹介などの注意喚起を行っています。

このような中、高岡市保護司会の皆様方による、地域の実情に精通するという特性を生かした献身的な更生保護活動は、安全で安心なまちづくりに大きく寄与されているものであり、警察はもちろんです、県民の皆様方も大きく期待を寄せているところでございます。

警察では、今後とも皆様方と連携し、特殊詐欺などの犯罪抑止対策を着実に推進してまいりたいと考えており、引き続き、ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、高岡市保護司会をはじめ、会員の皆様のお力をお借りし、ご健勝ご活躍を心からご祈念申し上げます。



第Ⅱ期地域別定例研修会報告



令和6年度の第Ⅱ期地域別定例研修会は、9月13日、富山保護観察所 鎌仲彩子保護観察官を講師に、保護司67名参加のもと、高岡市役所で行われました。

今回は、1つの事例から4つの設問「初回面接」「就労支援についての面接」「往訪の面接」「就労について、8グループに分かれて、それぞれ10分間討議をしました。

どのグループも実際に担当している対象者と向き合っているという、真剣な面持ちで、熱心に意見交換を行い、発表後には、鎌仲保護観察官から次のような助言がありました。

①「初回面接」では、保護司が自己紹介し、保護司とはどんな立場かを伝え、関係を築くことを大切にすること。②「就労支援についての面接」では、就労意欲が高いことを認め、仕事の探し方などをアドバイスすること。③「往訪の面接」では、生活状況を確認し、家族からの聞き取りをしたいときには同席をお願いし、

家族への理解と協力を求める。④「就労につながらない対象者への助言」では、仕事に就けない理由やハローワークから、仕事の種類や情報を提供してもらい、対象者と一緒にできることをねらっていく。

また、富山県就労支援事業者機構などのネットワークを大いに活用してほしいと話されました。定例研修会では、日頃の悩みや疑問が改善されたり、新しい情報を得ることができたり、これからも有意義な研修会を目指して企画しますので、多数のご参加をよろしくお願いします。(研修部会 深松 慶子)

再犯を防止して安全・安心な社会へ

図:更生保護法人全国保護司連盟より

無職者の再犯率は有職者の約3倍!

再犯をして刑務所に戻った人の多くが仕事をしていませんでした



高岡市更生保護女性会 70周年記念大会

寄り添うつながる人ヒトひと

7月15日、高岡市更生保護女性会70周年記念大会が、更女会員、保護司、一般の方、約250名の参加を得てウイングウイング高岡4Fホールで開催しました。



開会式では角田幾子会長より、今日までの高岡市更生保護女性会の歩みと会員の方々への感謝の挨拶があり、富山保護観察所杉本郁子所長、富山県更生保護女性連盟谷内和子会長、角田悠紀高岡市長より祝辞を頂きました。

続いて、2名の保護司方にも出演をいただき5名で、邦楽(琴、三絃、尺八)の演奏が披露され、心地よい響きに感動しました。

記念講演では、児童文学作家の村中李衣さんの「哀しみの中に光を抱く」を拝聴しました。

絵本を通して、女性受刑者とその子供との関係を見つめ直し、出所後の更生に生かしてほしいと2010年から活動をされている先生は、実際にステージ上でも絵本を読んでくださり、きれいな優しい声が一人ひとり

の心に届いて、温かい気持ちに包まれました。

14日には、高岡愛育園でワークショップが行われ、高岡愛育園生、高岡法科大学生、富山国際大学生、更女、保護司など約60名が参加しました。



図書館で準備した100冊の絵本が、あつという間に、高岡愛育園の会場に並べられました。そして、村中先生の工夫を凝らした進行と話術に引き込まれ、全員が自然に仲間になり、絵本を通してお互いの触れ合いがもてました。



村中先生から「更生の道に、ものがたり光を」というはなむけの言葉を頂き、新たな道しるべとして、より更生保護の道に進まうとする思いが高まりました。(更生保護女性会 大指 博美)

高岡市更生保護協力雇用主会 総会・研修会報告

8月23日に、令和6年度更生保護協力雇用主会総会が、高岡市ふくおか総合文化センターで開催されました。

林光彦常務理事の司会で、八田正人会長の開会の挨拶があり、続いて富山保護観察所杉本郁子所長から祝辞をいただきました。

また、来賓として、高岡公共職業安定所山元光代次長、高岡市社会福祉協議会尾崎憲子会長、高岡市福祉保健部上森智美次長、高岡市更生保護女性会大場洋子副会長、富山県就労支援事業者機構向山友子事務局長に、ご出席をいただきました。

総会は、八田議長の議事進行で、令和5年度の事業及び収支決算報告と会計監査報告があり、満場一致で可決されました。続いて、令和6年度の事業計画案と収支予算案も可決され、山岡弘之副会長の閉会挨拶がありました。

研修会では、富山保護観察所西野礼二統括保護観察官から「更生保護就労支援の必要性和支援内容について」講演をいただきました。

再犯者人員・再犯者の推移や再犯防止の推進に向けた課題や現状の支援状況を聞き、さまざまな「生きづらさ」に対して、それぞれに応じた支援と保護観察所以外の関係機関とのフォローアップ体制の必要性も感じました。

最後に、平田和雄副会長の閉会挨拶で、すべての日程は終了しました。
(協力組織部会 大口 政邦)

◇協力雇用主の役割

高岡市保護司会の皆様には、日頃より更生保護活動ならびに、就労支援活動へのご理解とご尽力を賜り、誠にありがとうございます。

私は、富山県就労支援事業者機構の立ち上げより、就労支援活動に参加しており、これまで8名の対象者を雇用してきましたが、さまざまな出来事がありました。数日で辞める者、再犯して再び刑務所へ戻る者。また、長期間勤めてくれて、保護観察所長賞を頂いた喜ばしい事もありました。

昨今、人手不足の折、弊社でも出所者の定着を目指していますが、どのようにコミュニケーションを取るか、社内に出所者である事を公表するかどうか、などさまざまな葛藤があります。

そこで、昨年より富山県就労支援事業者機構では、就労支援員として向山友子氏を迎えて、富山県内の就労支援活動がより強力な体制になりました。

雇用主からの相談や、出所者の定着支援までを長期的にサポートし、万が一、離職した際にも迅速に機構内の登録企業を斡旋する事で、再犯防止の大きな一助となっています。

この新しい体制を、より強固にするためには、関係諸団体ならびに地元企業の理解と協力が、必須となります。今後、更なる連携とご指導を賜りますようお願いいたします。

結びに、保護司会ならびに関係諸氏のご活躍を心より祈念いたします。
(協力雇用主会副会長 山岡 弘之)

保護司退任に向けて思うこと

平成6年12月に保護司を拝命して、はや30年になりました。当時は、まだ何もわからず、ただ不安でいっぱいでした。

富山保護観察所の新任保護司研修会では、当時は、一泊二日での缶詰研修であったと記憶しています。法律関係は全く無知に等しく、まして更生保護法などは知る由もありませんでした。

3年目位に、保護観察(環境調整)の依頼がありました。「ああ、とうとう来たか」と慌てて研修資料を引っ張り出して、何度も何度も読み返し、平生からの不勉強を痛感しました。

毎日、新聞を読んでいますが、犯罪は通信機器の発展とともに、巧妙になっており、国内はもちろん国外からも現実にはたくさん発生しています。

保護司は犯罪抑止や保護観察で、一人でも多くの対象者を更生に導いていかねばなりません。日々の研修でスキルアップすることが望まれます。

また、保護観察所職員、県・市保護司会や関係諸団体との多くの出会いなどが、自身を成長させてくれると思っています。
(北部支部 山本 雅信)

現場力50のレポート

私が保護司として初めて担当したのは、未成年のA君で、彼は少年院に入っており、近々仮退院の予定でした。彼の経歴については、学校時代に、非行などいろいろの問題行動を起こしていたという報告書がありました。

私は初めての担当に不安もありましたが、根拠のない自信も多少はありました。この根拠のない自信というのは、かつて定時制高校に在職中に、問題児とされていた生徒を担当しましたが、その彼が、どんどん良い方向へ変わっていった、真面目に学業に精を出し、遂には生徒会長にまでなったという、言わば成功体験があったからです。

紙面の都合で詳しい話は割愛しますが、A君を担当してみると、根拠のない自信は何の力にもなりませんでした。

ある時ちよつとしたことを注意したら「お前、しゃべるな」という言葉とともに、凄いいつきで睨まれました。その瞬間、根拠のない自信は、いとも簡単に崩れ去り、彼との価値観の相違や、お互いの心と心との隔たりを痛感しました。

自信と傲慢は紙一重であり、いつの間にか私は、かなり傲慢にA君に接してしまっていたのだと思います。

その後しばらくして、A君の保護観察は終了しましたが、私にとって、この事例は、未だに苦い思い出として心に深く残っています。

そして、自分の正義感は、どこかで人を傷つけてしまう場合もあり得るのかもしれないと今は思っています。
(西部支部長 安居 登)



犯罪や非行を防止し、立ち廻りを変える地域のチカラ
第74回 社会を明るくする運動
「思い」は「心」を動かす。思いが行動を促す。思いが人を動かす。思いが社会を変える。

東部支部 村牧 真紀子

保護司一年目を迎えて

令和5年12月に保護司を拝命し、一年が経ちました。この一年、さまざまな研修会や講演会に参加し、事例や先輩方の体験談を聞いた際に、責任の重さを痛感しております。

「私に保護司が務まるだろうか？」お声をかけていただいた時、まず思ったことです。ボランティア活動は嫌いではなく、人の役に立つ喜びを味わうことができませんが、「保護司」は私にとって未知の世界のように感じました。

最近見た朝ドラで、大変心に残った主人公のセリフがあります。「生い立ちや信念や格好、男か女かそれ以外かに関係なく・・・、すべての人が快適でいられるよう努力します」が、今も心に残っています。保護司として、今の私にできることとして、地域との連携を密にし、「誰もが住んでいて良かった、と思える快適なまちづくり」に尽力することです。



(公財) 高岡・富山県立総合センター

そして、もし対象者を担当するときに来たら、寄り添い、立ち直るお手伝いができるよう自分を高めることだと思います。先輩方にご指導いただきながら、微力ではありますが、明るい地域社会になるよう、自分のできることから取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

西部支部 広地 功信

社会を明るくする運動強化月間中に行われる、中学生生活体験発表大会を今年も見ることができました。

私が中学生生活体験発表大会を見ることになったきっかけは、支部に割り当てられた動員をクリアするためであったのは正直なところですが、生徒たちの体験や、考え方、思いなどを真剣に訴える姿勢に感動し、来年も是非見に行こうと思うようになりました。



7月30日、西部支部ミニ集会を五位中学校区で実施しました。

今年、富山県警察本部少年サポートセンター西部分室の松長紀美子主任を講師に、「SNS危険防止研修会」最近の子供たちの現状」を演題に、SNSの利用をきっかけに起こる犯罪、SNS等への悪ふざけ投稿が及ぼす影響等について講演をいただきました。

小中学校関係者、地域諸団体関係者等約40人の方々がメモを取りながら真剣に聞いておられる様子を見ると、子供たちがネット社会の落とし穴に引き込まれないよう、関係者が揃って注意喚起する必要があると感じました。

南部支部 山良 順子

人生、生涯学びの機会

平成11年12月に保護司を拝命し、その直後に、会社の重責を担う立場にも成り、両立の狭間で不安を抱きながらのスタートでしたが、既に25年の月日が経ちました。

これまで担当した対象者は、少年・中高年の男女で、暴力・窃盗・放火・無免許運転の常習など、さまざまな環境で生きてきた価値観の違う人で、少しでも相手の気持ちに寄り添い、支えになる存在でありたいとの思いで、信頼関係を築く事に注力してきました。

過去は消す事はできませんが、これからの生き方次第で、必ず新たな人生を拓く事が出来る、と信じて向き合い、心の奥の苦悩や思いにも耳を傾け、些細な事でも時には認め、承認欲求を満たしてあげることもありました。

しかし、常にイエスマンであったわけではなく、時には愛情のある厳しさをもって、指導することもありました。更生を目指し再犯を起こさせないためには、保護司の関わり以上に、身近な家族や引受人の理解と協力を勝るものはありません。

「人生、生涯学びの機会」との言葉を受けて拝命した保護司ではありますが、年を重ね、今までの経験をとおして、力及ばずも、その都度、私自身にとって、多くの気づきと学びの機会を頂けたことに心より感謝し、退任の挨拶といたします。皆様、本当に有難うございました。

北部支部 秦 正枝

7月12日、成美公民館において、北部支部ミニ集会を開催しました。

48名参加のもと、富山県警察本部少年サポートセンター西部分室串田君代係長を講師に、「薬物乱用の現状と課題」について講演がありました。

DVDを視聴した後、薬物汚染の実態や少年少女を取り巻く社会環境について、説明していただきました。

薬の過剰摂取「オーバードーズ」が増加していることや、SNSの普及により、簡単に大麻や違法薬物が手に入り易くなっていることなど、若年層を取り巻く現状と課題を詳しく話されました。



自分自身を薬物から守るためには、①正しい知識を身に付ける。②ルールを守る。③夢や目標をもつ。④自身自身を大切にすること。⑤自分が大事で困ったときに「助けて」と相談できる勇気と力も必要であると語られました。

Advertisement for the book 'オーバー・ドーズな人たち' (Overdose People) by Sasaki Chizuru. The cover features a cartoon illustration of a girl and a boy. Text on the cover includes 'オーバー・ドーズな人たち' and '佐々木チワワ 著'.

伏木支部

鶴谷 茂樹

～ 退任のあいさつ ～

50 歳を目前に、少しは社会に貢献すべきではないかと考えていたところ、地区保護司の方から声を掛けていただき、2002 年 48 歳で保護司を拝命しました。



最初は戸惑いましたが保護観察、環境調整と担当させて頂いた、くうち、気が付けば 22 年の歳月が流れ、昨年 12 月には法務大臣表彰を頂き、大変名誉なことと喜んでおりました。

ところが、1 月 1 日に発生した能登半島地震によって、自宅は半壊してしまい、来年 3 月には全面解体の予定です。現況は、残った家財の片付けをしながら、月の半分は被災者支援を受けて、娘たちの住む東京で過ごし、高岡と東京を往復する生活を続けています。このような状態の中で、このまま保護司としての職責を継続していく事は不可能であると判断し、このたび保護司を退任させていただくことにいたしました。

長い間、皆様方には大変お世話になりました。結びに、皆様方のご健康とご活躍、高岡保護司会のみまますのび発展をお祈りいたします。

戸田支部

大木 保久

～ 初心に返って取り組む ～

保護司を委嘱され、富山保護観察所での新任保護司研修会 2 日目の休憩時間に、「早速ですが 1 号観察の担当をお願いします」と言われ、保護司として最初の活動が始まりました。

当時は振り返ると担当書類が届いてから本人が来訪する迄、何度も書類を読み返し、そして面接のシミュレーションをするなどして備えていました。



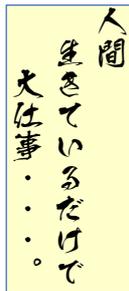
また、対象者が来訪しない時などは、約束を守らせようと本人の立ち寄りそうな所を探し回るといふ、緊張感のある保護観察でした。それ以後、今日まで延べ十数名を担当してきましたが、年数を経て相当数を担当してきた事による慣れと最近保護観察事件が減少傾向にある為か、いっしょに緊張感が薄れていると思つたところに、先日、生活環境調整の担当通知が届き、忘れかけていた緊張感が再び蘇って来ました。

この度の生活環境調整は、何れ保護観察対象者として担当する事になると思いますが、保護司のキャリアの終盤を迎え、もう一度、あの時の初心に戻り、言動に注意しながら、相手の想いを汲みとった適切なアドバイスができる面接になるよう、心がけていきたいと改めて思っています。

福岡支部

子吉 徹

7 月は、犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域の力を合言葉に、法務省主催の第 74 回「社会を明るくする運動」の強調月間です。これを受けて、私たち福岡支部では、ふくおか総合文化センターにて小中学生を対象に作文発表大会と基調講演を毎年行っています。



2 か月前から準備を行い、1 か月前に学校の作文応募担当教諭が優秀作文を選考、更に保護司が中心となり青少年育成高岡市民会議、青少年補導委員会と更生保護女性会を交えて審査し、発表者を決めています。併せて、講師の選定も同時に行っています。

発表当日は、更生保護団体および学校関係者や PTA が中心となり運営し、司会進行は生徒が行います。富山保護観察所、警察署、高岡市保護司会、県市議会議員、自治会関係者などを招き、小中学生約 200 人の参加のもと、盛大に行っています。

この運動の実施には、主に福岡地域各戸からの募金と高岡市や社会福祉協議会の補助金で支えられています。



11 月には、優秀作品を掲載した広報誌を全世帯に配付します。地域が犯罪や非行のない明るい社会づくりの意識醸成に今後とも貢献していきたいと思えます。

○ 作文コンクール

毎年、社明運動で多くのことを学ばせていただいております。殊に、作文コンクールに寄せられたその一つ一つには、小中学生の社会が明るく平和なものでありたいと願う優しく、力強い想いを感じます。親友や級友、家族など、子供たちの身近な人間関係を題材にしたものから、ボランティアに参加して気づいたこと、犯罪を引き起こしてしまふ人間の心情など、まさに『明るい社会』を願う力強い主張ばかりでした。その中で、最も私を引きつけた作品に『家族』がありました。

親が子のために食事を作り、洗濯や掃除をする。朝は「おはよう」と声をかけてくれる。そうした日常の中で、親が悩みや学校での話に真正面から耳を傾け、応えてくれた作文でした。

その子には、こうした支えが社会で生き続けられる力となっていることに感動しました。もし、日本国中に、こうした家庭があふれていたなら、子供たちが心を癒し、心から笑える居場所があつたとしたら、自分を見失い、家族を見捨て、犯罪に走るなどあるはずがないと思えます。

社会を明るくする運動の原点には、「家庭」という子供も大人も自然体で安心して過ごせる居場所を作る運動でもあると思えます。

子供たちから届けられた小さな声と大きな想いを受け止め、責任ある職責を果たしていこうと改めて心に刻んだ意義ある運動となりました。

(地域活動部会 旭 健志)

児童虐待防止体制の整備が急務 「子どもの人権を守る」施策

全国的に児童虐待事案が急激に増え始めた平成29年以降、平成30年に東京都目黒区で5歳の女の子が、養父に暴力を受け「もうお願いゆるして」と反省文を残して死亡しました。

また、平成31年には千葉県野田市で10歳の女の子が、父親に日常的に暴力を受け「先生どうにかできませんか」という言葉を残して死亡しました。



保護者層

児童虐待防止は喫緊の課題!!

痛ましい事件が起るたびに、国民の間では、最悪の事態は避けられたのではないかと児童虐待処遇のあり方が取りざたされました。

以後、児童福祉法や児童虐待防止法が改正され、各機関の垣根を超えた児童虐待防止体制の強化が図られ、抜本的に体制が見直されてきました。

富山県においても、専門職である児童福祉司や児童心理司の増員、高岡児童相談所の移転新設など児童福祉施設

の環境改善や支援、県市町村と警察との連携強化、職員研修の充実などがみられ、警察が虐待者を暴行や傷害で摘発するケースが大幅に増えました。

こどもまんなか
子育て家庭庁
189
#オレンジリボン 児童虐待防止
推進キャンペーン

トモニテは
オレンジリボン・児童虐待防止推進
キャンペーンを応援しています

実施期間
11/1 (Wed) ~ 11/30 (Thu)

子ども一人での留守番やお使いは、違法とする国もあり、また、しつけと称しての体罰や食事抜きなどは、日本では虐待にあたります。

分室、県総合教育センター教育相談窓口、県こども・若者総合相談センターが集約した「富山県こども総合サポートプラザ」が開所します。児童虐待のほか非行、不登校やいじめ、ひきこもりなどの相談にも応じ、さまざまな悩みや不安を抱える子どもや家庭に寄り添い、きめ細やかに対応することになります。

数年後には、富山児童相談所が、県リハビリテーション病院・子供支援センター施設内に拠点を移し、医療機関とのつながりを強化する方針です。

児童虐待防止体制の人的・物的整備は「子どもの人権を守る」に欠かせない施策であり、関係機関・関係者の方には「こどもまんなか社会」の実現に向けたさらなる協力をお願いします。
(広報部副部長 中田 保博)

みんなで考えよう 集団社会で「個の時代」に警鐘（職業から世相を観る）

日本経済は長く低迷し、失われた30年と言われ、この間、賃金は上がっていない。また、格差と少子高齢化も著しく犯罪の増加にも危惧しています。さて、昭和の時代は大家族が多く、10人など珍しくはありませんでした。兄妹も5人や6人などの家庭もあり、私の知る限りでは8人兄弟で、3世代同居の12人という、家が何軒かありました。

当時、お盆や正月には、本家や実家に親戚の人たちが集まり、会食などを通して相談や歓談をして、お互いの仕事や健康などの現況を確かめ合い、兄弟や従妹たちは、勉強や運動を競い合うという一面もありました。

その親戚の中には、ちょっと怖い頑固な叔父さんや、優しくもお節介な叔母さんが必ず一人は居て、親戚や、その子どもたちが道を踏み外さないように、お互いに何らかの影響を与え合っていたように思います。

また、年忌の法事を勤めるとなると大変で、親族が15人から20人は集まり、多い家では30人も親類が集まることも珍しくはありませんでした。

さらに、葬儀になると地区在所の人たちがその家に集まり、男性は葬儀の準備や香典の受付などを、女性は、おにぎりや味噌汁を作ってくれていました。

そんな中、当時の葬儀の参詣者が数十人単位で大型化する過程で、式場は自宅から寺院、そして公民館に移行し、それでも会場に入りきれない場合も生じていたので、平成14年頃からは、ホールでの葬儀が主流になりました。

ところが、令和元年頃から、家族葬という形式が、都市部から地方の市町村にまで急激に広まり、コロナ感染症も影響し、葬儀や法要に参詣する人は段々と少なくなり、ご近所同士はもとより、親戚でも顔を合わせる機会が、著しく減少し、交流が少ない「個の時代」に突入したと聞きます。

さて昨今、巷を騒がしている重大事件を起こした人の中で、中途退学者や、格差などから進学を諦めてしまった人が、約3割近くを占めています。彼らは地域社会との交流が少ない環境で生活しており、その中の社会から取り残された一部の者が、闇バイトにSNSで安易に登録し、首都圏を中心に発生している、緊縛強盗傷害や特殊詐欺などの犯罪を行ってしまっています。

今年の3月に、2021〜2024年の3年間の累計で、検挙された人数が1万人を超え、その数は今も増加傾向にあり、日本は犯罪多発国に成る分水嶺に立っていると警鐘を鳴らす犯罪学者もいます。

法務省が主唱する「社明運動」や、犯罪を防止し「安全・安心な地域社会の実現」が、困難な状態にあるようにも感じています。保護司の一人として、座視することなく、常に関心をもちながら、更生保護活動に取り組んでいかななくてはならないと改めて思っています。
(広報部 高桑 淨誓)

がんばろう北陸!



高岡市保護司会活動スナップ



令和6年能登半島地震ならびに奥能登豪雨の被害に遭われた皆様方に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を願っています。



角田 綾子 更生保護女性会長

本田 利麻 高岡市議会議長

富山県知事メッセージ伝達式
高岡駅万葉ロード (7/1)



駅長、警察署長、議長、市長の方々
高岡駅万葉ロード (7/1)



采田 和雄 高岡市保護司会会長

角田 悠紀 高岡市長

内閣総理大臣メッセージ伝達式
高岡駅万葉ロード (7/1)



市更生保護協力雇用主会総会で開会
挨拶の八田正人会長 (8/23)



市更生保護協力雇用主会総会で挨拶
の杉本郁子保護観察所長 (8/23)



メッセージ伝達を終えて社明啓発
活動の実施。



シャフルボード大会
ふれあい福祉センター体育館 (6/15)



市更生保護協力雇用主会の研修会で、
講演の西野礼二統括保護観察官 (8/23)



市更生保護協力雇用主会総会で、
閉会挨拶の山岡弘之副会長 (8/23)



広報部会、当会だより仕分け発送作業
サポートセンター (6/18)



第41回中田かかし祭
更女会中田支部作品 (9/21)



第74回「社会を明るくする運動」
中田地区事業 (9/20)

令和6年度秋の受章・表彰者紹介

◆藍綬褒章

竹平 幸雄 (南部支部)

◆法務大臣表彰

須賀 泉美 (東部支部)
山本 美和子 (西部支部)
小嶋 仁子 (北部支部)
桃井 善昌 (戸田支部)
耳浦 博行 (北部支部)

◆中部地方更生保護委員会委員長表彰

原 嘉伸 (東部支部)
酒井 立志 (北部支部)
高桑 淨誓 (戸田支部)
林 光彦 (戸田支部)
松野 久仁男 (西部支部)
本保 由喜美 (西部支部)
加藤 進 (南部支部)
白崎 孝則 (南部支部)
吉久 千惠美 (伏木支部)

◆中部地方保護司連盟会長表彰

平田 久子 (東部支部)
平野 智子 (福岡支部)
松川 和恵 (東部支部)
広地 功信 (西部支部)
大川 英一 (南部支部)

◆中部地方保護司連盟会長表彰(家族)

◆富山保護観察所長表彰

金田 紀子 (東部支部)
曾田 康司 (西部支部)
八田 正人 (西部支部)
炭谷 淳 (南部支部)

◆富山保護観察所長感謝状(勤続10年)

幸塚 昭英 (伏木支部)
高井 眞弓 (伏木支部)

◆富山保護観察所長感謝状(家族)

宇波 さちえ (東部支部)

◆富山県保護司会連合会会長表彰

四津谷 都 (東部支部)
平田 裕康 (西部支部)
小栗 伸元 (南部支部)
清水 康男 (南部支部)
松田 喜美江 (伏木支部)
村上 委千子 (福岡支部)

◆富山県知事表彰

近松 裕子 (南部支部)
中臣 信随 (戸田支部)

◆高岡市功労者表彰(保護司)

作井 宗人 (東部支部)
小嶋 仁子 (北部支部)

退任保護司

間片美代子様 (北部支部)

推薦書籍の紹介



内容・特殊詐欺の受け子、SNSを利用した犯罪など、変容する少年犯罪や、改正少年法施行による18歳と19歳の扱いが及ぼす影響を考える一冊。
著者紹介・鮎川潤氏、日本の犯罪学者で、関西学院大学名誉教授。

保護司の視点

「体験格差」とは・・・?

現代社会の新しい課題として「体験格差」があります。これは、「祝日に旅行などができない。一人で遊ぶ。など、学校の外で行われる体験機会の格差」のことで、例えば、夏休みの海水浴やキャンプ、芸術鑑賞や自然体験など、あらゆる「体験」の機会が、貧困や親自身の経験値などによって、子どもの社会でも格差が生じており、深刻な問題になっています。

子育て中の親に「体験格差」について説明したうえで「我が子に十分な体験をさせていると思うか」という設問に、「そう思う」「ややそう思う」を合わせた約6割の親が「体験させている」と答えています。しかし、残りの4割の子どもは格差に苦しみ、生きづらさを感じていると言われています。
これまで担当した対象者の約半数が、親の借金問題や、乳児の頃から今でも、母親が病院で治療中など、格差や、さまざまな問題を抱えていました。

M

事務局からの提案

いま、保護司を取り巻く環境は、犯罪防止推進計画の中、大きく変化しています。保護司相互の情報交換や、地域との連携がより求められています。
美味しいお茶を用意していますので、対象者との面接、会議や自己研鑽の場として、どうぞ高岡サポートセンターをご活用ください。
(事務局長 作井 宗人)

編集後記

文部科学省初等中等教育局では、不登校・いじめ対策等の推進として、不登校児童生徒数が小中学校で約30万人、そのうち学校内外の専門機関等で相談・指導等を受けていない小中学生が約11万4千人と、いずれも過去最多で、また、いじめ重大事態の発生件数も923件と過去最多となる中、「誰一人取り残されない学びの保障」に向けた取り組みの緊急強化が、必要であると方針を示しています。

速やかに実施してほしいと願って、ここに「たかおか更生保護だより」第47号を発刊します。(広報部)